

全釧路情報

2016.2.29 No.33 全釧路教職員組合

連続講座～「道徳」と「学力」について学び合いました

2月6日(土)は、第4回連続教育講座in標茶でした。午前中は道徳の教科化にどう向き合うか、午後は学力問題について意見交流しました。会場準備、当日の進行、レポートなど、支部を挙げて準備をしていただき、12名の参加者ととも、実のある学習の場となりました。

道徳の教科化に向けた学習では、まず、教育大の廣田先生が道徳の教科化を巡る諸問題について戦前の道徳教育からの歴史をふまえて分かりやすく整理して解説し、道徳教育を考える視点を示しました。

続いて、標茶支部の2人の先生のレポートをもとに、学習しました。坂本富士子先生は道徳推進教諭の研修会や「年間計画」「別業」など学校の状況について紹介し、それぞれの学校での様子や取り組み方について意見交流しました。鈴木健先生は、節分に関わって、係活動・道徳・生活科・国語科を繋ぐ実践を紹介しました。今、「私たちの道徳」の副読本を全く使用しないことは難しくなっている状況です。副読本での道徳や価値項目を取り扱いながらも、子どもたちの生活や教科学習と結びつけることで、徳目的ではなく子どもの生き方につながる道徳教育を進めることが大切だと、鈴木健先生の実践をもとに学ぶことが出来ました。

午後は、たっぷり時間をかけて、学力問題についての思いを交流しました。学テ、CRTの出題問題は、普段の授業、単元テストなどで扱っている問題とは全く違うため、問われていることの意味が分からずに泣いてしまう子がいる。そして、子どもが困らないために過去問で練習させるとそれだけで数時間もかかってしまう。「学力向上」と言いながら、矛盾しているのではないか。そうした実態も出されました。

学びの場に「集う」ことは、私たちの目指す教育観を再確認し、今の学校現場での実践の視野を広げることになり、それは組合の存在感を高めることにもつながります。今後もぜひ、学びの場に集い、語り合しましょう。



釧路市議会広報の不掲載問題が、一転 掲載に!!

「おかしい」と声を上げることの意味～「茶色の朝」を迎えないために

釧路市議会の議会広報に、2人の市議の質問が「不適切」だとして不掲載とした問題については、No.31でお知らせした通りです。この問題に対して、市議の報告会に多数の市民が詰め掛けたり、議会に多数の抗議の声が寄せられたり、反発も大きかったことから、一転して、質問内容を掲載することになりました。

政権や市長への批判が「不適切」だということでは、議会の意味がありません。市民の代表者である議員が批判的な目を持って議論をたたかわせることは、民主主義の根幹です。その意味でも、議会だよりへの掲載は当然の結果であると言えます。

最近、政権側の意向や「公共性」「中立性」を過度に忖度し自主規制する動きが多く見られるように感じます。学校でも「政治的中立性」と言って高校公民科の授業内容への圧力があつたり、高校生の校外での政治活動の届け出制を検討したり、思想や表現の自由にも踏み込むような動きがあります。

私たちは、「公教育」「政治的中立性」などと言って、思考停止に陥ってはいけないと思うのです。世の中の動きに対して、教育に携わる私たちこそが注意深く見て、おかしいことはおかしいと声を上げることが大事なのではないのでしょうか。「茶色の朝」を迎えないために！



当初、議会だよりはこのようになってしまっていたところでした。

▼「茶色の朝」(フランク・パヴロフ)～「茶色に守られた安心」の行き着く先



フランスで100万部以上のベストセラーとなった寓話です。フランスでは、「茶色」はナチスの制服を連想させる色です。フランスの「国民戦線」など、西欧諸国に極右運動が広がっていくことに対して、危機感を持った人も多く、フランク・パヴロフが『茶色の朝』を書いたのも、フランス社会がやがて「茶色」に染まってしまうのではないかという不安と、なんとかそれに人びとの注意を促したいという危機感のなかでのことだと言います。

日本でも、憲法が軽くなり、戦争する国づくりへ着々と進んでいるように感じます。声を上げることなくただ流されていった時に、世の中はどのように変わってしまうのか。今こそ読んで考えたい寓話です。

■物語のあらすじ(大月書店のホームページから)

世界中のどこにでもあるような、とある国の物語。友人と二人でコーヒーを飲みながらおしゃべりをするのを日課にしている男がいた。ある日、主人公は、その友人が飼犬を始末したということを知られる。その理由は、ただ毛色が茶色じゃなかったからだった。その国の政府は、茶色の犬や猫のほうがより健康で都市生活にもなじむという理由で、茶色以外のペットは飼わないことを奨励する声明を発表したばかり。主人公は、自分が飼っていた白黒の猫をすでに処分した後であったが、友人がその犬を始末したことに少しショックを受けた。時は流れ、二人は日課をいつも通りつづけていたが、小さな変化が起こっていた。人々は話し方を微妙に変え、茶色以外のペットを排除する政策に批判的だった新聞は廃刊になった。それでもたいては変わらない日々の生活がつづいた。友人はあたらしく茶色の犬を、主人公も茶色の猫を飼い始めた。でもその時には、さらに新しい状況が生まれていた。友人をはじめ、多くの人々の逮捕がはじまった。そして夜明け前—ある「茶色の朝」—主人公の家のドアをノックする音がする…。